

(八) 叡山の澄法師の理趣釈経を求むるを答する書

延暦寺は、延暦七年（七八八）、東大寺で「具足戒」を受けた最澄が比叡山の上に一庵を結び、自ら薬師如来を刻んでこれを本尊とし「一乗止観院」と名づけたことにはじまる。

以来、平安遷都という新しい国の動きに伴い、南都の仏教勢力に手を焼いていた桓武の庇護のもと、大乘仏教の論学を中心とした南都六宗に対し、大乘の精華である『法華経』とその他の大乘経典を所依としながら、天台智顛直系の天台学（円）と密教（密）と大乘「菩薩戒」（戒）と止観行（禅）の、四宗兼学の根本道場として盛んになり、のちに円仁・円珍・安然・良源などの俊才が出て台密を大成し、さらには山上の厳格な修行であった常行三昧を發展させ称名念仏（専修念仏）により極楽往生や他力信仰を広めた法然・親鸞や、止観を中国禅に学んで臨濟禅や曹洞禅に發展させた栄西・道元や、蒙古の襲来という国家存亡の時代を背景に『法華経』の独自の解釈により立正安国の宗をかまえた日蓮や、『往生要集』の源信（恵心僧都）、『愚管抄』の慈圓、踊り念仏の空也などを輩出した。

延暦二十五年（八〇六）一月、最澄の新しい仏教は年分度者二名（止観業・遮那業各一名）が僧綱所に許められ宗（天台（法華円）宗）としてスタートするが、最澄の真の希いは比叡山上に国家認定の大乘戒壇を設け、そこで大乘「菩薩戒」を受戒した者が官僧として認められ、比叡山に残って天台宗を修学し大成することであった。そのことは、とりも

なおさず天台宗の勢力拡大、南都仏教からの独立、南都官大寺に代る国家仏教の担い手、を意味する。

比叡山は平安京の北東に位置し、都の鬼門を鎮護する靈域であったが、歴史が下ると山内の僧侶のあいだに対立が起こり、その上に武装化する法師もあらわれていわゆる僧兵の跋扈する山となる。院政によって権勢を誇った白河法皇が「朕が心にままならぬものは、賀茂川の水、双六の賽、山法師（叡山の僧兵）」と嘆き、足利六代將軍義教、管領細川政元も僧兵と対峙して堂塔を灰燼に帰し、戦国の覇者織田信長も叡山を焼き討ちに行っている。実際に比叡山に登りその凜とした聖域の空気にふれてみると、往古僧兵を擁して時の政治権力に対抗した強い仏法護持・靈山守護の念が今もなお伝わってくるような気がする。

伝教大師最澄は、神護景雲元年（七六七）近江国滋賀郡古市郷（今の大津市）で生まれた。渡来系の三津首の家系を出自とする。十二才の時近江国分寺の行表の室に入り、十四才で得度し最澄と名のつた。延暦四年（七八五）、十九才の時に東大寺戒壇院で「具足戒」を受け、ほどなくして比叡山に上り草庵を結んで山林修行と仏典読破に専念する。延暦七年（七八八）に今の「根本中堂」に当る「一乗止観院」を創建し、自ら刻んだ薬師如来を本尊として祀る。桓武天皇が平安京に遷都をしてまもない延暦十六年（七九七）、内供奉十禅師の一人に任ぜられた。

延暦二十一年（八〇二）、高雄山寺において法華会を行い『法華経』を講義する。この年、第十六次遣唐使に同行する還学生の許可を上奏して認められた。

延暦二十二年（八〇三）、通訳に弟子の義真（のちの天台宗第一世座主）を連れ、第十六次遣唐使船で「難波ノ津」を出発するも一週間の内に悪天候のため船が損傷し、船の修理のため翌年の六月まで太宰府で待機を余儀なくされた。

延暦二十三年（八〇四）七月、遣唐大使藤原葛野麻呂ほか空海たちを乗せた再出発の第十六次遣唐使船に「那ノ津」で乗船、一路明州をめざしたが東シナ海で暴風雨に遭いふたたび船が損傷。九月に辛くも明州に上陸をはたし、ただちに目的地の天台山に向かった。

翌延暦二十四年（八〇五）夏に帰国するまでの九ヶ月の間、天台教学の始祖天台智顛の孫弟子になる道邃（どうすい）と行滿（ぎょうまん）に天台教学を、また道邃からは『梵網経』の「十重四十八軽戒」を、儵然（しゆくねん）からは禅を、明州に向かう帰途紹興の峰山道場で龍興寺の順晄から密教を、それぞれ受学するなど天台山を中心に当時の中国仏教を精力的に修学した。

同年七月に帰京し、唐から持ち帰った仏典類の二百三十部四百六十巻を「将来目録」として上奏するとともに、病床にあった桓武天皇の病氣平癒を宮中において祈願した。桓武は最澄の「将来目録」から日本に密教がもたらされたことを知って大いに喜び、九月には早速高雄山寺において灌頂を行わせ、南都仏教の長老たちを呼びつけて受法させたほか、自らも受法した。

しかしその後最澄を重用していた桓武天皇が崩御し、最澄の運氣にもかげりが見えはじめる。この年の秋十月、在唐二十年を義務とする留学生として長安にいたはずの空海が、正統密教の伝法八祖となつて帰国し、短期ながら長安留学の一大成果を「請来目録」として朝廷に提出し、その内容を知つた最澄は自らの密教の不備を察知した。

大同四年（八〇九）七月、空海は最澄が住持をしていた和氣氏の私寺高雄山寺に迎えられるが、この時最澄はこころよく住持の立場を譲つた。また、空海が高雄山寺に落ち着いたばかりの八月下旬、最澄は弟子経珍を空海のもとにやり、十二部五十五卷からの密教経軌や悉曇関連典籍の借覧を申し出た。経珍にもたせた手紙の末尾では「下僧最澄」とまでへりくだっている。

しかし、空海はこれを一度断る。密教の受法は師から根機の弟子に口授をする「師資相承」が習いで、まして密教の儀軌や梵字悉曇の経軌を書写しそれを読んだところでわかるわけがなく、それを心得ないためかいきなり密教典籍の借覧を申し出てきた最澄のマナーや真意にいぶかしさをおぼえたであらう。

それでも最澄は空海のもとに使いをやり借経をつづけた。空海もそれに応じた。さらに最澄は自分の代りに勝れた弟子を空海のもとに置き密教を学ばせることを申し出たが、空海はこれも了承した。

空海のもとに派遣されたのは最澄の最も信頼厚い円澄・泰範らであった。最澄は、比叡山の遮那業（密教）の指導者あるいは試験官を養成する目的だったであろう。しかし、好事に魔は多く、やがて愛弟子泰範があるうことか比叡山と最澄を捨て空海に走るといふ、最澄にとつて痛恨事に発展した。その原因はおそらく、最澄がずつととりつづけた密典の借覧・書写・読解といった独学自習がいかに密教の師資口授の鉄則に違背しているか、それを我慢して貸しつづける空海の神経をどれだけ逆なでしているか、空海のもとで密教をじかに修めていた泰範には師の無神経な誤ちがたまらなくなつたのであろう。泰範はもと南都の元興寺にいた。若き日に大安寺や元興寺や興福寺ほかの官大寺に出入りしていた頃の空海と、その頃から気脈を通じていたのではあるまいか。

弘仁三年（八一二）十一月、高雄山寺で空海から金胎兩部の灌頂（「受明灌頂」）を受け、が心中に期待をしていた正式な灌頂（「伝法灌頂」）ではなく、大いに落胆する。

弘仁四年（八一三）になると、最澄は再度空海に正式な灌頂の要請をする一方、空海のもとから帰る気配のなくなつた泰範にたびたび手紙を送り、彼に預けたままの『止観弘決』を返してほしいと厭味も添えるようになる。そしてこの年の十一月になつて、最澄は『理趣釈』（『大楽金剛不空真実三摩耶經般若波羅蜜多理趣釈』不空訳、略して『理趣釈経』ともいう）の借覧を申し出る。『理趣釈』とは、『金剛頂経』系密教の奥義を説いた『般若理趣経』（『大楽金剛不空真実三摩耶經般若波羅蜜多理趣品』不空訳）の注釈である。『般若理

趣経』では毘盧遮那如来が他化自在天において、人間の性欲は菩薩の心位では清浄なもので価値転換され、「生仏一如」・「煩惱即菩提」の境地を男女交合の悦楽をメタファーに説くためやたら密教未修学の者には与えない。与える場合は、師が弟子の機根をよく見極め、講伝という厳粛なかたちをとる。師と離れたところで独学自習することなどもつてのほかである。最澄はそれを心得なかつたのであろうか。『理趣経』を空海から借りて一人読解しようとした。空海がこれに応ずるはずがなかつた。

空海は返事して言う。「叡山ノ澄法師理趣経ヲ求ムルニ答スル書（『性霊集』）である。文の途中で最澄を「汝」「子」と親しみを込めながらも、くどいほどに暗喩を借り、最澄の密典読解の態度や『理趣経』に対する無知を暗に批判し、無神経な借経の申し出に応じない。この二年半後、二人の関係は自然消滅的に途絶える。

蛇足ながら、「叡山ノ澄法師理趣経ヲ求ムルニ答スル書」の「澄法師」とは円澄（第二代天台座主）のことで、最澄は『理趣経』の借覧を申し出てはおらず、空海と最澄の関係途絶はこの『理趣経』の借覧が原因ではなく、密法受法の口授の礼法をわきまえず密典の独学読解に終始する最澄に空海が嫌気した、という説がある。

しかし、この書簡にある「夫レ秘蔵ノ興廢ハ唯汝ト我ナリ」の文意からしても、当時の日本密教を担うのは最澄と空海以外にはなく、「叡山ノ澄法師」とは最澄であることは明ら

かである。空海のもとで空海の密法を親しく受学し、密法受学の礼法である面授・口授をよく知る円澄が師の最澄をさしおいて秘奥の密典『理趣釈』に手を出すことなどありえまい。

時に、最澄は空海との間で密教に苦悶したが、会津磐梯山にいた法相の学僧徳一にも悩んだ。晩年に五年つづいた「三一権実諍論（論争）」である。そのため、会津から常陸にかけて徳一の教団勢力に阻まれ、念願の東北地方への教線拡張をはたすことができなかつた。正直な性格により真摯かつ厳格な修学僧として比叡山を舞台に天台の教義と密教・禪・戒律・念仏などを組織化し、平安時代の国家仏教の担い手たるべく奮闘をした最澄であったが、生涯の後半は多事多忙となり自らの天台の教義を体系化するに至らないまま、弘仁十三年（八二二）六月四日、五十六才で示寂した。

この十二年後の承和元年（八三四）三月、宣旨によってこの山に上った空海は、六人の高弟とともに西塔院の落慶供養に参じ咒願師の役をつとめた。空海は生涯を了えるちょうど一年前、よきライバルであった最澄の比叡山に詣でたのである。感慨は無量だったであろう。

●本文…書信至深慰下情 雪寒 伏惟 止觀座主 法友勝常 貧道易量 貧道與闍梨
契積有年歲 常思 膠漆之芳 與松柏不凋 乳水之馥 將芝蘭彌香 舒止觀羽翼
高翥二空上 聘定惠驥騮 遠跨三有外 分多寶座 弘釋尊法 此心此契 誰忘誰忍
雖然 顯教一乘 非公不傳 祕密佛乘 唯我所誓 彼此守法 不違談話 不謂之志
何日忘矣

書き下し…書信至つて深く下情を慰む。雪寒に伏して惟れば、止觀の座主、法の友、勝れ

たること常にして貧道量り易し。貧道、闍梨と契を積むこと年歲有り。常に思う。膠漆

の芳しきこと、松柏とともにして凋まず。乳水の馥しきこと、芝蘭とともにして彌

香し。止觀の羽翼を舒ばして、高く二空の上に翥び、定惠の驥騮を聘せて、遠く三有の

外に跨がる。多寶の座を分かち、釋尊の法を弘む。此の心此の契り、誰か忘れ誰か忍ば

ん。然りと雖ども、顯教一乘は公に非ざるは傳えず。祕密の佛乘は唯だ我が誓う所なり。

彼れ此れ法を守り、談話だんかいに違いとまあらず。之を謂いわざるの志、何れの日に忘れんや。

私訊…お手紙をいただいて私の気持ちは深く慰められました。雪寒の季節の今日、伏して思いますのに、止観院の座主であり仏法の友であるあなたは常に勝れた人で、私などは能力の程度がはかり易いものです。小生、貴阿闍梨とそれぞれの立場でこの国に仏法を広める約束を交わしてから幾歲月、常に思っていることですが、にかわと漆とが交って現れる色や艶の評判の良さは、常盤木の常緑不変の節操とならべてみても萎れることはなく、乳水の良い匂いは香りのよい草とならべてみてもいよいよ良い香りがします。

(あなたは)止観の翼をのぼして高く人法二空の上に飛び、止観の駿馬を走らせて遠く三界の外にまで駆け跨いでおられます。多宝塔のなかで多宝如来と釈尊が並び立っているようにして私たちはそれぞれの立場で釈尊の仏法を広めています。この心情と約束は誰が忘れたり忍ばずにいられますようか。

ただし、顕教の天台宗は皇室や朝廷官職にしか伝わらず、真言宗は私が誓った教えで、それぞれにそれぞれの仏法を守っているのですが、二人でゆっくり話し合う時間がありません。しかし、それは言わなくても約束した志は、いつになっても忘れるものではありません。

※註記1…下情は、庶民の実情。転じて、(へりくだって)私の気持ち。上意の反対。

※註記2…雪寒は、「このころ」とする読み（『三教指歸 性靈集』（岩波書店））あるも、敢えて「雪寒に」と読んでみた。

※註記3…止観は、ここは最澄の延暦寺のものと名の「一乗止観院」の「止観」ととる。

その由来は、『摩訶止観』「天台小止観」。仏教の中心的な瞑想法の「止」（シヤマタ samatha）と「観」（ヴィパシユヤナー vipasīyana）。「止」は意識を一点に集中すること。「観」は意識の対象を正しく（空観で）観察すること。

※註記4…座主は、比叡山延暦寺の座主。ここは最澄の尊称。

※註記5…貧道は、僧侶が自分のことをいう時のへりくだりの表現。

※註記6…年歳は、年月。

※註記7…膠は、にかわ。

※註記8…松柏は、一年を通じて緑を保つことから、節を守って変らないことの喩え。

※註記9…乳水は、蘇乳。

※註記10…芝蘭は、靈芝と蘭。香りのよい草。

※註記11…二空は、人法二空。

※註記12…翥は、飛ぶ、はふる。

※註記13…定恵は、止と観。

※註記14…驥騮は、駿馬。

※註記15…三有は、欲界・色界・無色界における生存。

※註記16…多寶は、多宝塔で多宝如来と釈迦如来が並立していること。転じて、最澄と空海が並び立っていること。

※註記17…顯教は、密教以前の仏教。

※註記18…一乘は、菩薩乘、天台宗。

※註記19…祕密佛乘は、真言密教、真言宗。

●本文…忽開封緘 具覺理趣尺 雖然 疑理趣多端 所求理趣 指何名相 夫 理趣道 釈経文 天所不能覆 地所不能載 塵刹之墨 河海之水 誰敢得盡其一句一偈之義乎 自非如来心地之力 大士如空之心 豈能信解受持乎 余雖不敏 略示大師之訓旨 冀子 正汝智心 淨汝戲論 聽理趣之句義 密教之逗留

書き下し…忽ちに封緘ふうかんを開いて、具ぐに理趣尺りしゆしゃくを覓もとむることを覚る。然りと雖も、疑うら

くは理趣は端多し。求むる所の理趣は何れの名相みょうそうを指すや。夫れ、理趣の道どう、釈経しゃくきやうの

文、天の覆うこと能わざる所、地のも載のすること能わざる所なり。塵刹じんせつの墨、河海かかいの水、

誰か敢えて其の一句一偈の義を盡すを得ん。如来心地の力、大士如空だいしにょくうの心に非らざるよ

り、豈に能く信解し受持せん。余、不敏と雖も大師の訓旨を略示す。冀わくは子みまし一汝みましの
智心ちしんを正し、汝の戯論けろんを淨め、理趣の句義くぎ、密教の逗留とらるを聽かんことを。

私訳・お手紙の封緘を開いてすぐに、懸命に『理趣釈』を探し求めておられることがわかりました。しかし、『理趣経』には般若という本質を隱喩的に説くことが多いのではないでしょうか、ですから、読んでわかるものか私は疑わしいと思っております。お求めになりたい『理趣経』とはどういう名称と形状のものを言っておられるのでしょうか。

そもそも、『理趣経』が説く道理や『理趣釈』の文は（広く深く）、天とて覆うことができず、大地にも積載することができないほどです。塵のように無数の国土の土でできた墨と無数の国土の河や海の水で（摺って筆で書くにしても）、その一句や一偈の説く意味を書き尽すことは誰が敢えてやっても不可能です。如来の広大な慈悲心の大地の力や菩薩の無辺の空のような心に非ずして、どうしてこれを信じ納得し、受法し保持することができましょう。私は、機を見るに敏ではありませんが、師恵果和尚の教えの趣旨を略説しました。どうぞ大徳、あなたの智慧を積む心を正し、言語という虚構で密法を理解し口にするあなたの考え方を改め、『理趣経』の経句の意味や、密教の流伝の意味に耳を傾けていただきますように。

※註記1..封緘は、封筒を閉じること。閉じられた封。

※註記2..理趣尺は、通称『理趣経』の註釈。正式名『大樂金剛不空真実三摩耶経般若波羅蜜多理趣釈』（不空訳）。

※註記3..端は、ここは、いとぐち、きざし、端緒、兆候、の意とする。すなわち、般若

という本質を隠喩的に説く理趣、の意。

※註記4..名相は、名称と形状（外見）。

※註記5..理趣は、『理趣経』。

※註記6..釈経は、『理趣釈』

※註記7..塵刹之墨は、塵のように無数の国土の土でできた墨。

※註記8..河海之水は、無数の国土の河や海の水。

※註記9..大士は、菩薩。

※註記10..如空は、空のように広い、の意。

※註記11..信解は、信じ納得すること、

※註記12..受持は、受法した教えを保持すること。

※註記13..大師は、恵果和尚。

※註記14..訓旨は、教えの趣旨。

※註記15..子は、有徳の人、親しい間柄の人。『三教指歸』（岩波書店）の「なんじ」は
いかがか。

※註記16…汝は、ここは「みまし」「いまし」と読み、対等もしくはそれ以下の人に対し親しみを込めて言う代名詞。『三教指歸』（岩波書店）の「なんじ」はいかがが。

※註記17…戲論は、仏教で言う、言葉（虚構、仮構）で理解し口にすること。

※註記18…句義は、經典の一句ごとの意味。

※註記19…逗留は、長く留まること。ここは密教の伝来、の意。

●本文…夫 理趣之妙句 无量无边 不可思議 攝廣從略 弃末歸本 且有三種

一可聞理趣 二可見理趣 三可念理趣 若求可聞理趣者 可聞者 則汝聲密是也

汝口中言說即是也 更不須求他口中 若覓可見理趣者 可見者色 汝四大等即是也

更不須覓他身邊 若索可念理趣者 汝一念心中 本來具有 更不須索他心中

書き下し…夫れ、理趣の妙句は、无量无边にして不可思議なり。廣を攝して略に従い、未

を弃てて本に歸る。且く三種有り。一に聞くべき理趣、二に見るべき理趣、三に念ずる

べき理趣なり。若し聞くべき理趣を求めれば、聞くべきは則ち汝の聲密是なり。汝の口

中の言說即ち是なり。更に他の口中に求むべからず。若し見るべき理趣を覓れば、見る

べきは色なり。汝の四大等即ち是なり。更に他の身邊しんぺんに覓むべからず。若し念ずべき理趣を索もとむれば、汝の一念の心中に本來具有せり。更に他の心中に索むべからず。

私訳…そもそも、『理趣経』の般若理趣の深い意味を説く語句は数限りがなく、容易には理解できないものです。（ですから、経は）広い意味を簡略にし、末節のことは本質に戻して説いているわけです。

思えば、『理趣経』のとらえ方に三種あって、一つは聞くべき理趣、二つには見るべき理趣、三つには念ずるべき理趣です。もし、聞くべき理趣を求めるならば、聞くべきはあなたの口から出てくる言葉で（語密）、決して他人の言葉に（聞くべき理趣）を求めないでください。もし、見るべき理趣を覓めるなら、見るべきは色法（色や形といった物質的な属性）です。あなたの（身体の原素の）地・水・火・風などで、決して他人の身邊に覓めないでください。もし、念ずべき理趣を索めるなら、あなたが一心に本尊を念ずる心中に生まれながらに具わっています。決して他人の心中に索めないでください。

※註記1…妙句は、般若理趣を説く意味の深い語句。

※註記2…聲密は、口密・語密。自分の言葉に一切法清淨（声字実相）の理趣が内在している、と読む。

※註記3…言説は、言葉。

※註記4…色は、仏教で言う色法、色や形がある物質的原素。

※註記5…四大は、地・水・火・風。色法に一切法清浄の理趣が内在している、と読む。

※註記6…身邊は、身のまわり。『三教指歸 性靈集』（岩波書店）の「他身の邊」と読むのはいかがか。「他の口中」「他の身邊」「他の心中」と私は読む。

※註記7…具有は、生まれながらに具わっている。心に本来清浄の理趣が内在している、と読む。前掲書の「本もとよりの来かたつぎ具たつぎに有り」という読みはいかがか。ここは「本来具有せり」と読む。

●本文…復次有三種 心理趣 佛理趣 衆生理趣 若覓心理趣者 汝身中有 不用覓別人身中 若求佛理趣 汝心中能覺者即是 又可求諸佛邊 不須覓凡愚所 若覓衆生理趣者 汝心中 有無量衆生 可隨其覓 又有三種 文字 觀照 實相也 若覓文字 則聲上屈曲 即是不對不碍 若紙墨和合生文字 彼處亦有 又須覓筆紙博士邊 若求觀照 則能觀之心 所觀之境 无色无形 誰取誰與 若求實相 則實相之理 无名相 无名相者 與虛空冥會 彼處有空 更不用外

書き下し…復た次に三種有り。心の理趣しんと、佛の理趣と、衆生の理趣なり。若し心の理趣

を覓もとれば、汝の身中に有り。別人の身中に覓もとむるを用いず。若し佛の理趣を求むれば、汝の心中に能く覺るは即ち是れなり。また諸佛の邊へんに求むべし。須らく凡愚ほんぐの所に覓むべからず。若し衆生の理趣を覓れば、汝の心中に无量の衆生有り、其れに隨つて覓むべきなり。また三種有り。文字（の理趣）、觀照かんしょう（の理趣）、實相じつそう（の理趣）なり。若し文字を覓むれば則ち聲しやうの上に屈曲くつぎよくす。即ち是れ不對ふたい不碍ふげなり。若し紙墨しぼく和合して文字を生ずれば、彼の處にまた有り。また須らく筆紙ひつしを博士の邊へんに覓むべし。若し觀照を求むれば則ち能觀のうかんの心、所觀しよかんの境きやうなり。色なく形なく、誰か取り誰か與あたえん。若し實相を求すれば則ち實相の理、名相みやうそうなく、名相なくば虛空きよくうと冥會みやうえす。彼の處くうに空くう有り、更に外ぐわいに用いざれ。

私訳…また次に三種の理趣があつて、心の理趣と、佛の理趣と、衆生の理趣です。もし、心の理趣を求めるのならば、あなたの心中にあつて、別人の身中に覓める必要はありません。

せん。もし、佛の理趣を求めるのなら、あなたの心中でよく覚るのがこれです。諸仏に近い範囲で求め、決して凡夫のいる所に求めるべきではありません。もし、衆生の理趣を覚めるなら、あなたの心中に数え切れないほどの衆生がいるはずで、それらに従って覚めるべきです。

また、三種（の理趣が）あり、文字（の理趣）、觀照（の理趣）、實相（の理趣）ですが、もし、文字（の理趣）を覚めるならば、（それは）音・声に従って折れたり曲ったりしています。それは二項の対を越えた和合・無礙の意味です。もし紙と墨が和合して文字を生めば、そこに文字の理趣があり、それは筆や紙をそれに通じた専門家の近くに覚めるべきであります。もし、觀照（の理趣）を求めるならば、それは見る側の心（能）と見られる側の対象（所）で、（そこには能所なく、実体としての）色も形もなく（無色）、能取（執着）も所取（執着されるもの）もありません。もし、實相（の理趣）を求めるなら、それはすなわち實相の理（＝諸法実相）で、事物事象（現象態）の名称や形状は言葉による仮構であって実体がなく、そうであれば虚空に相入・合一して見えません。そこに空があつて、さらにそれ以外のものは必要ありません。

※註記1…邊は、中心や基準から近いところ。

※註記2…凡愚は、凡夫・衆生。

※註記3…觀照は、見ること、觀察すること。

※註記4…實相は、世俗の世界の事物事象（現象態）はほんとうは因縁所生のものであり、
実体がなく、言葉（仮名）による仮構にすぎないこと諸法実相。

※註記5…聲は、音・声・響き・言葉。

※註記6…屈曲は、折れ曲がること。文字が音・声・響き・言葉に従って書かれる様。

※註記7…不對不碍は、紙と墨、筆と紙のように、二つ（対の）ものが和合して無碍であること。

※註記8…能觀所觀は、見る側と見られる側。

※註記9…境は、見られる側の対象。

※註記10…名相は、前述。名称や形状。

※註記11…冥會は、相入、合一。

※註記12…空は、事物事象（現象態）は因縁所生の仮構であつて、それ自体で存在する
ものではなく、無実体・無自性 \parallel 空であること。

●本文…又所謂 理趣釋經者 汝之三密 則是理趣也 我三密 則是釋經 汝身等不可得 我身等亦不可得 彼此俱不可得 誰求誰與 又有二種 汝理趣 我理趣 即是也 若求汝理趣 則汝邊即有 不須求我邊 若求我理趣 則有二種我 一五蘊假我 二无我大我 若求五蘊假我理趣 則假我者 无實體 无實體者 何由覓得 若求无我大我 則遮那三密即是也 遮那三密 何處不遍 汝三密即是 不合外求

書き下し…又所謂、いわゆる理趣釋經とは、汝の三密則ち是れ理趣、我が三密則ち是れ釋經なり。

汝の身等の不可得にして我が身等もまた不可得なり。彼れ此れ俱に不可得にして誰か求め誰か與えん。又、二種有り。汝の理趣と我が理趣、即ち是れなり。若し汝の理趣を求むれば則ち汝の邊に即ち有り。須らく我が邊に求むべからず。若し我が理趣を求むれば則ち二種の我有り。一つは五蘊の假我、けが二には无我の大我なり。若し五蘊の假我の理趣を求むれば則ち假我は實體無し。實體無しとは、何に由つて得るを覓めんや。若し无我の大我を求むれば則ち遮那の三密、即ち是れなり。遮那の三密は何れの處に遍せざらんや。汝の三密、即ち是れなり。合わせて外に求むるべからず。

私訊…また、いわゆる『理趣釈經』とは、あなたの三密が『理趣經』で、私の三密が『理趣釈經』なのです。あなたの身・口・意はそれ自体であるものではなく、私の身・口・意もまた同じです。かれこれ共にそれ自体であるものではなく、誰が求め誰が与えるでしょう。

また、二種（の理趣）があり、あなたの理趣と私の理趣、これです。もしも、あなたの理趣を求めれば、それはあなたの近くに有り、決して私の近くに求めるべきではありません。もし私の理趣を求めれば、そこに二種の私があつて、一つは五蘊から成つてゐる仮の私と、二つには無我の眞実の私です。もし五蘊から成る仮の私の理趣を求めるなら、

仮の私には実体がありません。実体がないものはどうやって証得できましようか。もし、無我の真実の私を求めるなら、大日如来の三密、これです。大日如来の三密はどこにも遍満しないことはありませんので、あなたの三密もこれです。このことは前述のことと合せて外に求める必要はありません。

※註記1…三密は、身（手印、羯磨印）・口（真言、法印）・意（本尊観想、三昧耶印）の三密。

※註記2…假我は、仮の言葉（仮名）で語られる私。

※註記3…无我は、自我がないこと、実体がないこと、無自性。

※註記4…大我は、真実の私。因縁生の私。無自性・空の私。

※註記5…遮那は、毘盧遮那、大日如来。

●本文…又余未知 公是聖化耶 爲當凡夫耶若佛化 則佛智周圍 有何所闕 更事求
覓 若權故求覓 則如意悉達事外道文殊事尺迦 若實凡求 則應隨佛教 若隨佛教
則必須慎三昧耶 越三昧耶 則傳者受者俱无益也

書き下し…又、余未だ知らず。公は是れ聖化^{しょうけ}なるや、當^はた凡夫^た爲^たるや。若し佛化^{ぶつげ}なれば則

ち佛智は周圓し、何ぞ闕けるところ有つて、更に求覓を事とせん。若し權の故に求覓すれば則ち悉達の外道に事え文殊の尺迦に事えるが如し。若し實を凡に求むれば則ち應に佛教に隨うべし。若し佛教に隨えば則ち必ず須らく三昧耶を慎しむべし。三昧耶を越えれば則ち傳者受者俱に无益なり。

私訳…また、私は未だわかつていないのですが、あなたは衆生を化導する聖のお立場ですか、それとも凡夫・衆生のお立場ですか。もし衆生を化導する菩薩のお立場なら、サトリの智慧があなたの周圍に満ち、欠けるところもなく、どうして更に（『理趣釈』などを）求めることに専念しておられるのでしょうか。

もしも、仮の教え（方便、衆生濟度の手段）として（『理趣釈』）をお求めなら、それは悉達太子（釈尊）が外道に事え、（釈迦如来よりも先に仏になった、過去仏の）文殊菩薩が釈迦如来に事えるようなものです。もし真実の教え（般若理趣の道理）を凡夫に求めるなら、密教に従うべきで、もし密教に従うのなら、誓戒（三昧耶戒）に氣を配らなければなりません。誓戒を守らず越法の罪を犯せば伝法の阿闍梨も受法の弟子も無益であります。

※註記1…聖化は、衆生を化導する聖の立場。

※註記2…佛化は、衆生を化導する菩薩の立場。

※註記3…佛智は、サトリの智慧。

※註記4…權は、仮の教え、方便門。天台で言う「權実」の「權」。

※註記5…悉達は、シツダ (Siddha) 太子。釈迦の幼名。

※註記6…外道は、仏教以外の宗教・思想。

※註記7…實は、真実の教え。ここでは天台の教義ととった。天台で言う「權実」の「実」。

※註記8…佛教は、ここは密教ととった。

※註記8…三昧耶は、ここは誓戒 (三昧耶戒) ととった。

※註記9…傳者は、伝法の阿闍梨。

※註記10…受者は、受法の弟子。

● 本文…夫秘藏興廢 唯汝我 汝若非法而受 我若非法而傳 則將來來法之人、何由
得知求道之意 非法傳受 是名盜法 即是誑佛 又秘藏奧旨 不貴得文 唯在以心
傳心 文是糟粕 文是瓦礫 愛糟粕瓦礫 則失粹實至實 弃眞拾偽 愚人之法 愚
人之法 汝不可隨 又不可求

書き下し…夫れ秘藏ひそくの興廢は唯だ汝と我なり。汝若し非法ひぼうにして受け、我若し非法にして

伝えば、則ち將來求法の人、何に由つて求道の意を知るを得ん。非法の傳受、是れを盜法と名づく。即ち是れ佛を誑く。又、秘藏の奥旨は文を得るを貴しとせず、唯だ心を以つて心に伝うるに在り。文は是れ糟粕、文は是れ瓦礫なり。糟粕瓦礫を愛し則ち粹實至實を失い、眞を棄て偽を拾うは愚人の法なり。愚人の法、汝隨うべからず。又、求むべからず。

私訳…そもそも、密教の興廢はあなたと私にかかっている。(その二人のうち)あなたがもし密教の法軌に従わないあやまった方法で受法し、私が同様にして伝法すれば、將來密教をの教えを求める人は何を根拠に密教求道の心を知り得るのでしょうか。密教の法軌に従わないあやまった方法による伝受、これを盜法と言ひ佛を欺くことになります。また、密教の奥義は文章(書物)を読むことで得ることを貴しとせず、ただ以心伝心で伝えるものです。文章は酒粕であり、また瓦礫です。酒粕や瓦礫に執着して純粹で最高の眞実を見失ひ、眞実を棄てて偽りを拾うのは凡夫の方法です。凡夫の方法にあなたは従うべきではありませんし、またそれを求めるべきでもありません。

※註記1…秘藏は、密教。

※註記2…非法は、正式な密教法軌に則らない伝法。

※註記3…傳授は、密法の伝授と受法。

※註記4…糟粕は、前述。酒粕。

※註記5…粹實は、混じりけのない真実。

※註記6…至實は、最高の真実。

※註記7…愚人は、前述。凡夫・衆生。

●本文…又古人 爲道求道 今人 爲名利求 爲名之求 不求道志 求道志 忘己道
法 猶 如輪王仕仙 途聞途説 夫子亦聽 時機不應 我師默然 所以者何 法是
難思 信心能入 口唱信修 心則嫌退 有頭无尾 言而不行 如信修 不足爲信修
合始淑終 君子之人也 世人厭寶女 而愛婢賤 咲摩尼 以緘燕石 好僞龍 失眞
像 惡乳粥 寶鑰石 瘦者是鑽左手則是

書き下し…又古の人、道の爲に道を求む。今の人、名利の爲に求む。名の爲に求むるは
求道の志ならず。求道の志は己を道法に忘るなり。猶、輪王の仙に仕えるは、途に聞き
途に説くが如し。夫れ子、亦聽け。時機の應ぜずんば我が師默然す。所以は何。法は是

れ思うこと難く、信心は能く入るなり。口に信修しんしゅうを唱うも心則ち嫌退けんたいす。頭有つて尾無し。言いて行ぜざるは、信修の如く信修と爲すに足らず。始めを合がっし終りを淑よくするは君子の人なり。世人は寶女ほうによを厭いといて婢賤ひせんを愛す。摩尼まにを咲わらい以つて燕石えんせきに緘かんす。僞龍ぎりゅうを好み

眞像しんざうを失なひ、乳粥にゅうしゆくを悪にくんで鑰石ちゆうじやくを寶たすとす。癭えいは是れ鑽うがち、手を左たすくは則ち是れなり。

私訳…また、先師先徳は仏道を究めるために仏法を求めましたが、今の僧侶は名譽や地位・財産のために仏法を求めています。名譽のために仏法を求めるのは求道の志ではありません。求道の志とは、我を忘れて仏法に没頭することです。加えるに、『法華經』(提婆達陀品)に、誕生した際に將來轉輪聖王になるとアシタ仙に予言された釈迦が、前世においてそのアシタ仙に『法華經』を聞くために仕えたと言われている話も、道理を聞いて(それを実行せず)それを他人におしゃべりするようなものです。

そもそも、大徳、また耳を傾けてください。私の師の惠果和尚は弟子に話して聴かせる時期と相手の機根(阿吽の呼吸)が一致しなければ黙っていました。何故かと言えば、密法は頭で考えることが難しく、信じる心篤ければ密法に入れるものなのです。口でいくら信じて修行すると言っても心は嫌になつて逃げるもので、頭があつても尾がないよ

うなものです。口でいくら言っても修行をしなければ、いかにも信修行のように見えてもそれを信修とするには不十分です。事の始めを一つにさせ終りを善しとするのは君子であり、世俗の人は転輪聖王がもつ「七宝」のうちの女宝（心美しい女性）を避けて個々の卑しい人を愛し、如意宝珠を笑つては宝玉のようで宝玉ではないまがいものの石には口を閉じています。（また）中国春秋時代の楚の大夫・葉公子高（沈諸梁）は偽物の龍（似て非なるもの）を好んで真実を見失い、身体のためになる牛乳粥を嫌って金ではない真鍮を宝物にしています。手にできた腫れものはこれを針や錐のようなもので穿ち（穴を開けて膿などを出し）、手（が化膿するのを）を助（左）けるのも以上のことと同じであります。

※註記1…古人は、先人。ここは先師先徳、ととつた。『三教指歸』（岩波書店）の「古の学者は己の為にし、今の学者は人の為にす」（『論語』憲問）の引用はいかがか。

※註記2…名利は、名譽や地位・財産。

※註記3…道法は、ここは仏法ととる。

※註記4…輪王は、転輪聖王。釈尊（仏陀）のような徳をもつた理想的な帝王。

※註記5…仙は、インドの聖仙。具体的には、釈尊が前世で『法華経』を聞くために仕えたという阿私仙（アシタ Asita）（『法華経』提婆達陀品）。釈迦が誕生した際その三十二

相好を見て、将来転輪聖王になると予言したという。

※註記 6 .. 時機は、機が熟すること。時期と話して聴かせる相手の機根。

※註記 7 .. 寶女は、転輪聖王のもつ「七宝」のうちの「女宝」。

※註記 8 .. 婢賤は、心の卑しい人。

※註記 9 .. 摩尼は、如意宝珠。

※註記 10 .. 燕石は、燕山から出る玉に似て玉でない石。まがいもの。

※註記 11 .. 僞龍は、偽物の龍。似て非なるものの喩え。漢の劉向撰『新序』の「雜事五」に言う楚の大夫・葉公子高の「葉公好龍」の故事のこと。

葉公子高好龍 鈎以寫龍 鑿以幕龍 屋室雕文以寫龍 於是天龍聞而下之 窺頭於牖
施尾於堂 葉公見之 棄而還走 失其魂魄 五色無主 是葉公非好龍也 好夫似龍而非
龍者也

※註記 12 .. 眞像は、眞実のすがた。

※註記 13 .. 鍮石は、眞鍮。

※註記 14 .. 瘦は、首筋にできるコブ。ここは、手にできる腫れものにとつた。

※註記 15 .. 左手は、左の手ではなく、手を左（佐）ける、の意に読んだ。

●本文…涇渭不別 醍醐誰知 欲知面妍媸 不如磨鏡 不可論金藥有无 欲達心海岸
不如棹船 不合談船筏虛實 不拔毒箭 空問來處 聞道不動 千里何見 雙丸足以
却鬼 一七可以得仙若使 千年讀誦本草太素 四大之病 何會得除 百歲談論八萬
法藏 三毒之賊 寧調伏乎 自非酌海之信磨鏡之士 誰能信一覺之妙行 修三磨之
難思 止々舎々 弗吾未見其人 其人豈遠乎 信修則其人

書き下し…涇渭別たずして醍醐誰か知る。面の妍媸を知らんと欲せば、鏡を磨くに如かず。

金藥の有無を論ずべからず。心海の岸に達せんと欲せば、船に棹さすに如かず。船筏の

虚實を談ずべからず。毒箭を抜かずして空しく來處を問ひ、道を聞き動かずして千里何

ぞ見えん。雙丸は以つて鬼を却けるに足り、一七以て仙を得べし。若使、千年本草太素

を讀誦すれども、四大の病、何ぞ會て除くを得ん。百歲八萬の法藏を談論すれども、三毒

の賊寧んぞ調伏せんや。海を酌むの信、鏡を磨するの士に非ざるより、誰か能く一覺の

妙行を信じ、三磨の難思を修せん。生まれ止まれ、舍まれ舍まれ。吾に弗^{あら}ずば未だ其の人見えず、其の人豈に遠からんや。信修すれば則ち其の人たり。

私訳・涇水（涇河）の濁りと渭水（渭河）の澄んでいるのを区別しないで（物事の良し悪しの道理や本質をわきまえないで）、誰に密法の醍醐の味（すぐれた教え）がわかるでしょうか。人の顔だちの美醜を知ろうと思えば鏡をみがくに越したことはなく、お金や美容薬の有無を論じるべきではありません。彼岸に到達しようと望むなら彼岸に渡る船（六波羅蜜）を竿で漕ぐ（六度の行を行う）ほかありません。船をくくりつけた橋の嘘か真かをおしやべりすべきでもありません。身体に刺さった毒矢を早く抜かずに何処から飛んできたかを問題にしたり、行くべき道を聞いても動かなければ千里の道がどうして見えましょうか。（道教の道士が使う）病除けの丹薬はそれを二丸飲めば鬼（厄病）を退けるに充分で、一さじ飲めば不老長寿の仙人になることができます。たとい、千年の間、中国最古の薬物書『神農本草経』や古典医学書『黄帝内経太素』を読誦しても、どうして今まで身体（四大）の病を除くことができなかつたのでしょうか。百年間、八万四千の法門を議論しても、貪・瞋・痴の三毒という悪者をどうして降伏させ改心させられないのでしょうか。海水を汲んで飲み干すくらいの信心、鎚を手入れしていつでも使えるようにしておく職人でなければ、誰がサトリを求めるすぐれた修行を信じ、思考力では

できない三昧を修習するのでありません。止めてください、止めてください。どうぞ留まってください、留まってください。私以外にあなたが求めているその人はまだ見えません。あなたが求めている人は遠い人でしょうか。(密法を)信じて修行するならば、あなたが求めるその人でしょう。

※註記1..涇渭は、涇水と渭水。中国陝西省にある河。涇水は濁り、渭水は澄んでいる、と『史記』范雎伝にあり。濁っているものと澄んでいるもの。真偽。

※註記2..醍醐は、仏教で言う「五味」のうちの「醍醐味」。極上の味。転じて仏性・涅槃。

※註記3..妍媸は、美しいことと醜いこと。

※註記4..船筏は、小舟を並べつないで筏のようにしたもの。渡り橋の意味もある。

※註記5..毒箭は、毒の箭。

※註記6..雙丸は、道教で言う、二つぶの丹薬。『抱朴子』内篇。

※註記7..一七は、ひとさじ。

※註記8..本草は、『本草経』。中国最古の薬物書『神農本草経』。

※註記9..太素は、『太素経』。中国の古典医学書『黄帝内経太素』。

※註記10..四大は、前述。身体の原素の地・水・火・風。

※註記11..八萬は、八万四千の法門。

※註記12..法藏は、仏教の教え。法門、仏法。

※註記13…三毒は、貪・瞋・痴。

※註記14…一覺は、前述、

※註記15…三磨は、三昧、三摩地。

●本文…若有信修 不論男女 皆是其人 不簡貴賤 悉是其器 其器來扣鐘谷則響
妙藥盈篋 不嘗无益 珍衣滿櫃 不著則寒 阿難多聞 不足爲是 釋迦精勤 伐柯
不遠 舉代皆然 悲哉 濁世化佛所以弃入 五千所以退者 雖毒鼓之慈廣而无邊
而干將之誠 高而有淬 師々誥訓 不可不慎 子若不越三昧耶 護如身命 堅持四
禁 愛均眼目 如教修觀 臨坎有績 則五智祕璽 旋踵可期 況乃 髻中明珠 誰
亦祕惜 努力自愛 因還此宗示一二 釋遍照 某年某月日

書き下し…若し信修すること有らば、男女を論ぜず、皆是れ其の人たり。貴賤を簡ばず、

悉く是れ其の器たり。其の器來りて鐘を扣かば谷則ち響く。妙藥篋に盈れど嘗めざれば
无益なり。珍衣の櫃に滿つるも著ざれば則ち寒し。阿難多聞なりしも是たるに足らず。

釋迦精勤せしも伐柯遠からず。擧げて代は皆然りなり。悲しい哉、濁世の化佛の所以は

入いりを棄すて、五千ごせんの所以ゆゑは退ひきく者ものなり。毒鼓どくこの慈廣じくわうくして无邊むへんと雖しかも、而しかして干將かんしょうの誠いましめ
め、高くして淬さい有り。師々しこうじんの誥訓ごくん慎しんしまざるべからず。子こ、若ごとし三昧耶さんまいやを越こえず、護まもる
に身命しんみょうの如ごとく堅しんく四禁しきんを持もち、愛あいするに眼目げんもくに均ひとしくして、教きやうの如ごとく觀かんを修しゆし、坎かんに臨りん
んで續つづ有あらば、則すなはち五智ごちの祕璽ひじ、踵きびすを旋めぐらして期ますべし。況いはんや乃なち、髻中けいちゆうの明珠みゆうしゆ、
誰たれか亦またた祕ひし惜おししまん。努力つとめよ、自愛じあいせよ。還かえるに因よりて此こゝの一二いちにを示しす。

釋しやくの遍照へんじやう 某たれの年某ねんたれの月日げつじつ

私訊ししん…もし、信しんじて修行しゆぎやうすることがあれば、男女なんにやを問とわず、みなあなたが求もとめている人ひとで
す。貴賤きけんに關係かんがなく、ことごとくあなたが求もとめている器きです。その人が目の前に現あらわれ
て鐘かねを打うてば（あなたに言葉ことばをかければ）、すぐまにその声こゑが谷間やまにこだますでしょう（す
ぐにあなたの心に響こぐでしょう）。妙葉めうえつが藥箱やくばうにあふれるほどあつても服用ふくようしなければ
無益むえきですし、珍しい衣服いふくがひつにいっぱいあつても着きなければみすぼらしく見えるもの
です。釈尊しやくそんの弟子でしで聞法もんぽうに秀しゆでて多聞たもん第一だいいちだった阿難あなん尊者そんじも（聞くだけで行いぜず）其そのの

人たりえず、釈尊が近くで精進努力しているわけですから、木の枝を切って斧の柄にするのに、その太さや長さの寸法は手許にある斧を見ればよく、遠くに手本があるわけではない故事のように、良い手本は身近にあるものです。過去の人たちは皆、そうしてききましたが、(しかし) 悲しいかな、末法も近いこの穢土の時代は、(観音のような) 応化身のそのわけも悟入(涅槃)を棄て(衆生済度に追われ)ることであり、五千の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷たちの増上慢や我慢や不信を懐くわけも仏教から遠ざかる者だからです。『涅槃経』に説く「毒鼓の縁」の喩えのような慈悲は広くして限りがないとはいえ、呉の刀工干将が呉王の劍を作る際、焼き入れの時に妻の髪を炉に入れたところ傑作ができたという教訓は、高く仰ぐべきでそこには(焼き入れの)精勵がある。師々代々の遺訓は謹んでこれを守らなければなりません。大徳、もし誓戒(三昧耶戒)を守り、身命を賭して堅く四重禁戒を護り保ち、自ら主眼とするところを愛するのと同じくし、師の教えの通りに観想を行じ、土穴に生け贄を入れ盟約の文書を読みあげて功績があった故事のようであれば、金剛界の五智如来の秘印を、かかとを回転させて(そちらを向いて)期待していいでしょう。況や、転輪聖王の頭頂のもとどりに秘せられた宝珠(『理趣釈経』)を誰が隠し出し惜しみまするでしょう。どうぞ、(私が言うように)ご努力ください。ご自愛のほどを。お使いがお帰りになるので一二書き示してみました。

釈遍照 ある年ある月ある日。

※註記1…「其器來扣鐘谷則響」を『三教指歸』（岩波書店）は「其の器來りて扣くときは、鐘谷響く」と読んでいるが、ただ「扣（たた）く」だけでは何を叩くのかわからない。「手を叩く」の意味か。その際「鐘谷」は「こだま」の意味のようであるが、「鐘谷」に「こだま」の意味はない。いかがなものか。私は「其の器來りて鐘を扣かば谷則ち響く」と読む。

※註記2…篋は、竹で編まれた、衣類などを保管する箱。

※註記3…櫃は、衣服などを収納する木箱。

※註記4…伐柯は、良い手本は身近にあることの喩え。『詩経』幽風・伐柯に「伐柯伐柯 其則不遠」。木の枝を切つて斧の柄にするのに、その太さや長さは手許にある斧を見ればよく、遠くに手本があるわけではない、の意。

※註記5…濁世は、仏法が形骸化し衆生済度にならない末世。

※註記6…化佛は、如來の變化身、応化身。

※註記7…入は、覺ること。悟入。

※註記8…五千は、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷など、増上慢・我慢・不信に陥つてい
る四衆等こと。『法華經』方便品に「爾時世尊 欲重宣此義 而說偈言 比丘比丘尼 有懷
増上慢 優婆塞我慢 優婆夷不信 如是四衆等 其數有五千 不自見其過 於戒有缺漏 護
惜其瑕疵」、すなわち比丘比丘尼が増上慢を懷き、優婆塞が我慢を、優婆夷が不信を懷
いていて、これらの四衆等合わせて五千人になると。

※註記9・・毒鼓は、いわゆる「毒鼓の縁」、毒を変じて薬となす喩え。『大般涅槃經』（曇無讖訳）如来性品（第四之六）に「復次善男子 譬如有人以雜毒藥用塗大鼓 大衆中擊之發聲 雖無心欲聞聞之皆死 唯除一人不橫死者 是大乘典大涅槃經亦復如是 在在處處諸行衆中有聞聲 悉滅盡貪慾瞋恚愚癡」とあり、すなわち、毒を塗った太鼓の音を聴くと皆しんでしまうが、唯一『涅槃經』を説く声を聴く人は三毒を消滅できるといふ喩え。

※註記10・・干將は、中国の呉王の刀劍をつくった刀工。呉王の劍を作る際、焼き入れの時に妻莫耶の髪を炉の中に入れてたところ初めて納得のものができた故事。

※註記11・・淬は、刀を作る際の焼き入れ。はげむ・つとめること。「淬」は、音が「さい」、訓が「にらぐ」で、刀を作る際に何回も炉に入れ、焼きを入れて鉄の質を堅くすること。これを『三教指歸』（岩波書店）は「かたす」と読み、「（名刀の使い方を知らぬ者は）自分を傷つけることがある」と註釈しているが、いかがか。ここは、刀工・干將と妻の精勵の比喩で「自分を傷つける」話か。

※註記12・・誥訓は、訓告、教訓を告げること。

※註記13・・四禁は、三昧耶戒における「四重禁戒」（不応捨正法戒・不捨離菩提戒・不応慳悋正法戒・不応不利衆生行戒）。

※註記14・・眼目は、眼、ここは自ら主眼とするところとする。『三教指歸』（岩波書店）の註に「一切如来加持護念したまふこと猶眼を愛するが如し」と『宝篋印陀羅尼經』にあると言ふのだが、『一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經』（不空訳、大正蔵、一〇

二二) にその引用文は見当らない。陀羅尼本文のなかにもない。

※註記15.. 坎は、「土六」の意味。『礼記』典礼下に「牲いけにえにのぞ湫ちかんで盟あひまう」とあり、その

註釈である鄭玄の註に「坎に牲を用い臨んで其の盟書を読む」とある。

※註記16.. 續は、手柄。

※註記17.. 五智は、五智如来。

※註記18.. 祕璽は、秘印。

※註記19.. 髻中は、髻がもとどり。髪の毛を頭頂で束ねたもの。転輪聖王(＝釈尊)のサトリの智慧に秘められた、の意。

※註記20.. 明珠は、前述。宝珠(智慧を象徴する宝玉)。